



Title	訃報 : 竹岡敬温先生を悼む
Author(s)	鳩澤, 歩
Citation	大阪大学経済学. 2023, 72(4), p. 21-22
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90777">https://doi.org/10.18910/90777</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



## 竹岡敬温先生を悼む

本学名誉教授竹岡敬温先生は、2022（令和4）年10月26日、病のためご入院中のところを亡くられました。ご逝去を悼み、そのご経歴とご業績の一端をあらためて紹介いたします。

先生は1932（昭和7）年1月、京都府のお生まれでした。1954（昭和29）年3月京都大学文学部をご卒業後、1957（昭和32）年3月同大学院文学研究科修士課程修了、1960（昭和35）年4月から大阪大学大学院経済学研究科で、経済史研究の泰斗であった宮本又次先生（本学名誉教授）に学ばれ、同博士課程を経て、1962（昭和37）年8月に本学助手に採用されています。講師、助教授を経て1976（昭和51）年1月に本学教授にご就任、1988（昭和63）年4月から1990（平成2）年3月まで大阪大学評議員を務められました。この間、1975（昭和50）年3月には経済学博士の学位を取得されています。また1964（昭和39）年から1966（昭和41）年まで、文部省在外研究員・フランス政府給費留学生としてソルボンヌ大学および国立高等研究院第6部門に学び、フランス物価史研究における指導的研究者であるエルンスト・ラブルース、ジャン・ムーブレらに直接の薫陶を受けられました。1981（昭和56）年からは1年にわたりパリ第10大学経済学科客員教授も勤められています。

1995（平成7）年3月の停年退職まで一貫して本学で社会経済史学・経営史学の教育・研究に献身され、同年4月に大阪大学名誉教授の称号を授与されました。また、本学ご停年後は大阪学院大学で2007（平成19）年3月まで教授として教鞭をとられ、2008（平成20）年4月に同大学名誉教授となられています。

先生は、わが国における社会経済史学ならびに経営史学の発展に大きく貢献されました。おもに西洋経済史・経営史とりわけフランス近現代経済史・経営史の研究において、綿密かつ堅牢な実証分析にもとづいた研究成果を多方面であげられ、これらはただちに学界の共有財産となっています。

先生は時系列データの厳密な統計処理にもとづく物価史研究を、わが国においてはじめて本

格的に導入されました。あわせてフランス・アナル学派の紹介と普及を通じて西洋史研究の視角拡大に寄与され、また、日仏の工作機械製造業の比較研究（国際共同研究）などにおいても独創的な業績をあげられました。最近では1930年代フランス現代社会史の叙述に尽力され、これらはそれぞれの分野で研究史上の画期をなすものとの評価が定まっています。

1974（昭和49）年に主著の一つ『近代フランス物価史序説—価格革命の研究—』（創文社・刊）を公刊されましたが、以降もきわめて精力的に著作を世に問われ続けました。1988（昭和63）年の『Des entreprises françaises et japonaises face à la mécatronique（メカトロニクス化に直面する日仏企業）』（共著）（LEST-CNRS・刊）、1990（平成2）年『「アナル」学派と社会史—「新しい歴史」へ向かって—』（同文館・刊）、2007（平成19）年公刊の全4部20章980ページにわたる大著『世界恐慌期フランスの社会—経済・政治・ファシズム』（御茶の水書房・刊）などですが、残念ながらご生前最後の著作となった2020（令和2）年の『ファシズムへの偏流—ジャック・ドリオとフランス人民党』上下巻（国書刊行会・刊）は、大家が研究史上ほぼ未踏の領域を独力で切り拓いたものとして、学界を超えた大きな反響を呼びました。

なおこれら多年の業績により、正四位に叙されています。

先生の価格史研究は、PCはおろか電卓すら普及していなかった当時、機械式の手回し計算機を用いて膨大な価格データを処理するというきわめて忍耐を要する作業により進められたものでした。その手回し計算機は現在も経済史経営史史料室の一隅にあり、数量経済史研究の労苦多い出発点を教えてくれています。昭和20年代後半の大学生として一面では苛烈な青春期をおくられた先生が、不健全な観念性を脱した数量的実証による歴史分析にまず没頭され、そしてキャリアの後期に政治イデオロギーの狂瀾をみた1930年代欧州社会に対峙されたことには、一後進として感銘を受けざるを得ません。

1980年代後半に先生の訶咳に接した我々の世代は、先生の温顔をのみ思い出せます。学部ゼミナール（現在の研究セミナー）では1987（昭和62）年からゼミ旅行で海外を訪れるのが恒例となり、これは当時の阪大ではまだ珍しく、他のゼミからもゼミ旅行にのみ参加する学生が多数いたほどでした。返還前の香港、台湾、マレーシアなどに私なども一緒出来ましたのは、いまでも忘れがたい思い出です。

先生から指導いただいた私どもが受けた、公私にわたる多大な御恩に触れる紙幅もありますが、あらためて深く御礼を申し上げ、安らかなご休息をお祈りいたします。

（鳩澤 歩 大阪大学大学院経済学研究科教授）